白河街区跡（推定成勝寺跡）発掘調査現地説明会資料

1992年12月12日

（財）京都市埋蔵文化財研究所

＜所在地＞　京都市左京区岡崎成勝寺町9番地・円勝寺町26番地

＜調査期間＞　1992年6月15日～1993年3月末日（予定）

＜調査面積＞　北区1800m^2・南区4000m^2（調査終了）

はじめに

勧業館敷地では、旧館建設時に多数の平安時代の瓦が採集されており、六勝寺のうちの成勝寺跡と推定されていました。今回、勧業館の立て替えに先だつ発掘調査を行っており、その成果の一部をここに報告します。

検出した主な遺構

調査区は北区と南区にわけて行っており、現時点では南区の調査を終えて北区の調査を行っています。

北区の調査では、白河街区の地割に関係する遺構が検出できました。この遺構は、幅2.5mの南北方向の堀（SX206）とその東約30mの平行する溝（SD217）で、埋まった土の中から12世紀の土器片や瓦が多数出土しました。SD217の西約3.5mでは南北柵列（SA255）を3間分検出しており、SX206のすぐ東で方形木組みの井戸（SE254）を検出しています。

また、これらの地割遺構の中間には平瓦の木口をそろえて積み上げた方形井戸（SE230）があります。埋まったのは14世紀ごろですが、六勝寺の廃絶が15世紀ごろと考えられており無関係ではないでしょう。

このほか、六勝寺の造営直前に埋められたと考えられる井戸（SE232）と土器溜り（SX234）を検出しています。とくに、土器溜りでは完全な形を残した土器群が重なるように出土しており、何らかの目的で使用された後に一括して廃棄されたものと考えられます。

まだ調査は進んでいませんが、下層には弥生時代後期から古墳時代にかけての墳墓が作られていたようです。現在、3世紀後半の方形周溝墓を6基確認しています。また、6世紀の小古墳と考えられる周溝も確認しています。周辺では、岡崎グランドの発掘調査で同時期の自然河川と古墳を検出しており、武徳殿の建設に伴う発掘調査でも弥生時代中期（紀

元前後）の方形周溝墓を確認しています。周辺一帯ではまだ集落跡は発見されておらず、自然河川による微高地上に墳墓が形成されていた様子が明らかになりつつあります。

調査を終了した南区では、平安時代後期の井戸を12基検出しています。すべて方形縦板組の井戸で、そのうち1基には瓦積みの上部構造が一部残っていました。六勝寺にかかわる平安時代後期の井戸が、これだけまとまって発見されたのは初めてです。また、現在の成勝寺町と円勝寺町の町境で15世紀に埋まった幅8mを越える大規模な東西方向の堀を検出しています。この堀の北肩部分では平安時代後期に遡る東西溝を検出しており、白河街区復元の新たな資料となるでしょう。

このほか、上層では匣鉢を多量に廃棄した粟田焼き関係の長大な土壙を検出しています。粟田焼きについてはすでに廃絶し不明なことが多いのですが、江戸時代の京焼きの代表的な焼き物です。

また、下層では平安神宮火山灰層（AT）の確認調査をしました。その結果、現地表下4.5mの地点で火山灰層を確認しています。これらの火山灰は、鹿児島湾にあった火山が2万数千年前に噴火したときに飛来したもので、旧石器時代の年代推定の基準になっています。

出土した主な遺物

平安時代の遺物は、土師器皿・瓦器椀などの日常雑器のほか、南区の井戸内から特殊な用途で使用されたと考えられる白色土器や輸入陶磁器が出土しています。輸入陶磁器は中国の長沙銅官窯で製作された黄釉褐彩壷で、平安時代前期に輸入し伝世されたと考えられます。寺院に関係する遺物としては多くの瓦類が出土していますが、文様面に漆を塗った瓦製品が出土したことは注目できます。この瓦製品の文様には一般的な巴文のほか、羽を広げた鳳凰を便化した優美な文様がありますが、残念ながら用途はわかりません。このほか、緑釉を施した土塔なども出土しており、六勝寺との深い関係が想定できます。

下層の遺物はまだ調査が進んでいないことから多くはありませんが、小古墳の周溝から6世紀に特徴的な須恵器の坏蓋が出土しています。また、方形周溝墓の溝から3世紀後半である弥生時代後期から庄内式期の土器片が出土しており、墳墓の形成された時期がわかります。

成勝寺について

鴨川の東岸白河の地は、平安京外ではありますが平安京の条坊を延長した外京であったと考えられています。平安時代の終わりごろ、この地に皇室によって六つの寺院が次々と建立されました。これらの寺院は、すべて法号に「勝」の字がついていたことから総称して六勝寺と呼ばれています。これらの寺院を建立供養された順に並べると以下の通りになります。

法勝寺	白河天皇	承暦元年（1077）十二月十八日
尊勝寺	堀河天皇	康和四年（1102）七月二十一日
最勝寺	鳥羽天皇	元永元年（1118）十二月十七日
円勝寺	待賢門院	大治三年（1128）三月十三日
成勝寺	崇徳天皇	保延五年（1139）十月二十六日
延勝寺	近衛天皇	久安五年（1149）三月二十日

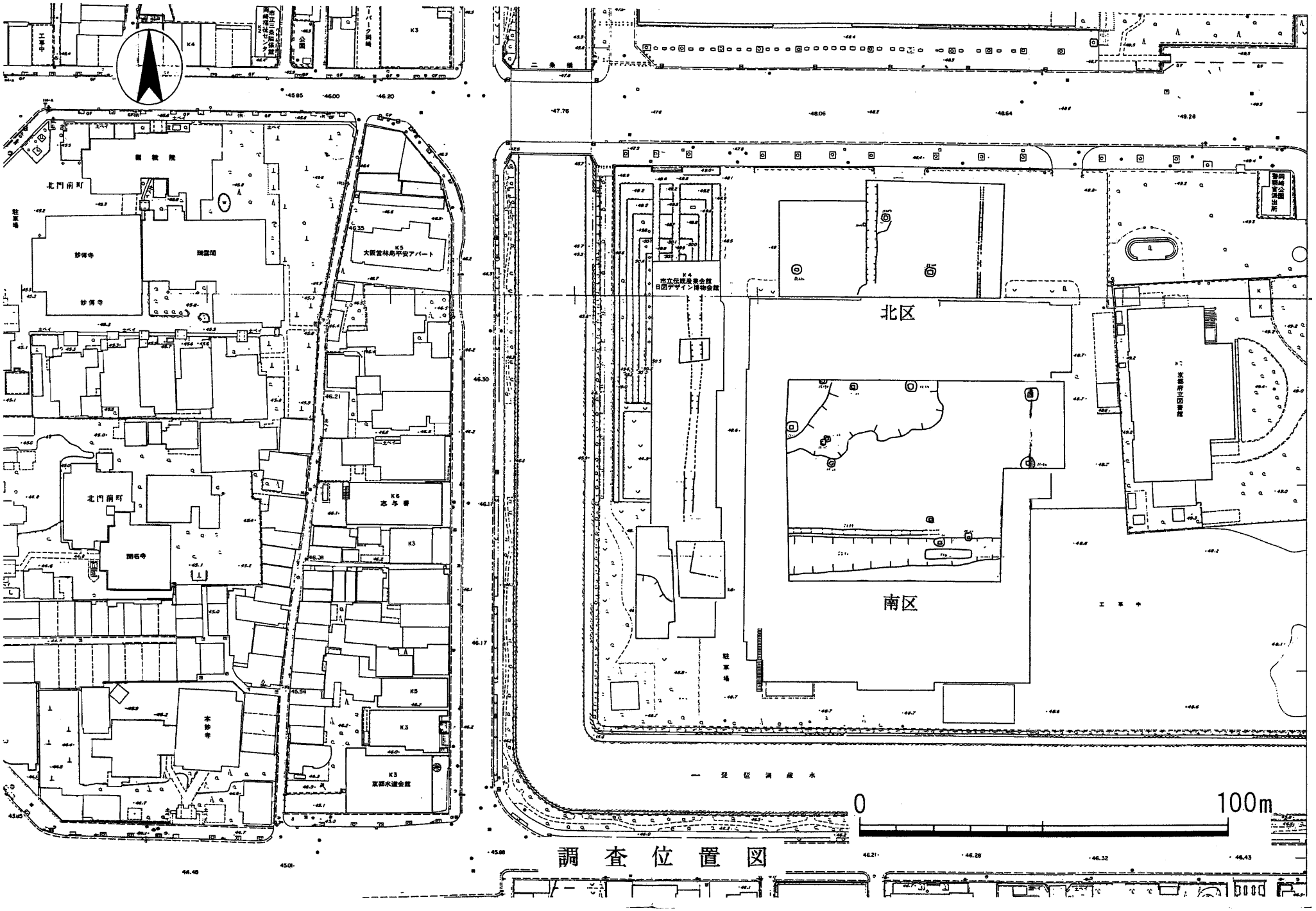
成勝寺は崇徳天皇の御願寺として創建され、保延5年（1139）10月26日に落慶供養が行われました。落慶供養の様子を記した「成勝寺供養式」によると、七間四面裳層の金堂を中心に東西には複廊の軒廊が延び、東西廻廊の先端には経蔵・鐘楼が取り付く伽藍が復元されており、法勝寺と類似した伽藍配置を持っていたことが分かりますが、塔は建立されなかったようです。また、方一町の寺院地を巡る築地には南大門・東門・西門・北門が建てられていました。この後も五大堂や観音堂などが建てられ伽藍が整備されていきました。なお、崇徳天皇は、保元の乱（1156）で後白河天皇と対立して敗れ、讃岐に流されて怨霊となったと伝えられています。成勝寺では、治承元年（1177）に後白河院によって崇徳院の菩提をともらうための御八講が修され、以後、鎌倉時代まで崇徳院の霊を慰撫する御八講が続けられました。六勝寺は天皇や上皇の個人を対象とした祈祷を通じて政権や国家の安泰を祈る、天皇家の御願寺としての私的な性格をもっていましたが、成勝寺は怨霊慰撫によって天下の静謐を祈る特異な寺院であったことがわかります。その後の成勝寺については関係史料も少なくわからないことが多いのですが、京都を中心舞台として戦われた応仁の乱（1467）で京都の町は荒廃し、成勝寺も廃寺となったと伝えられています。

粟田焼きについて

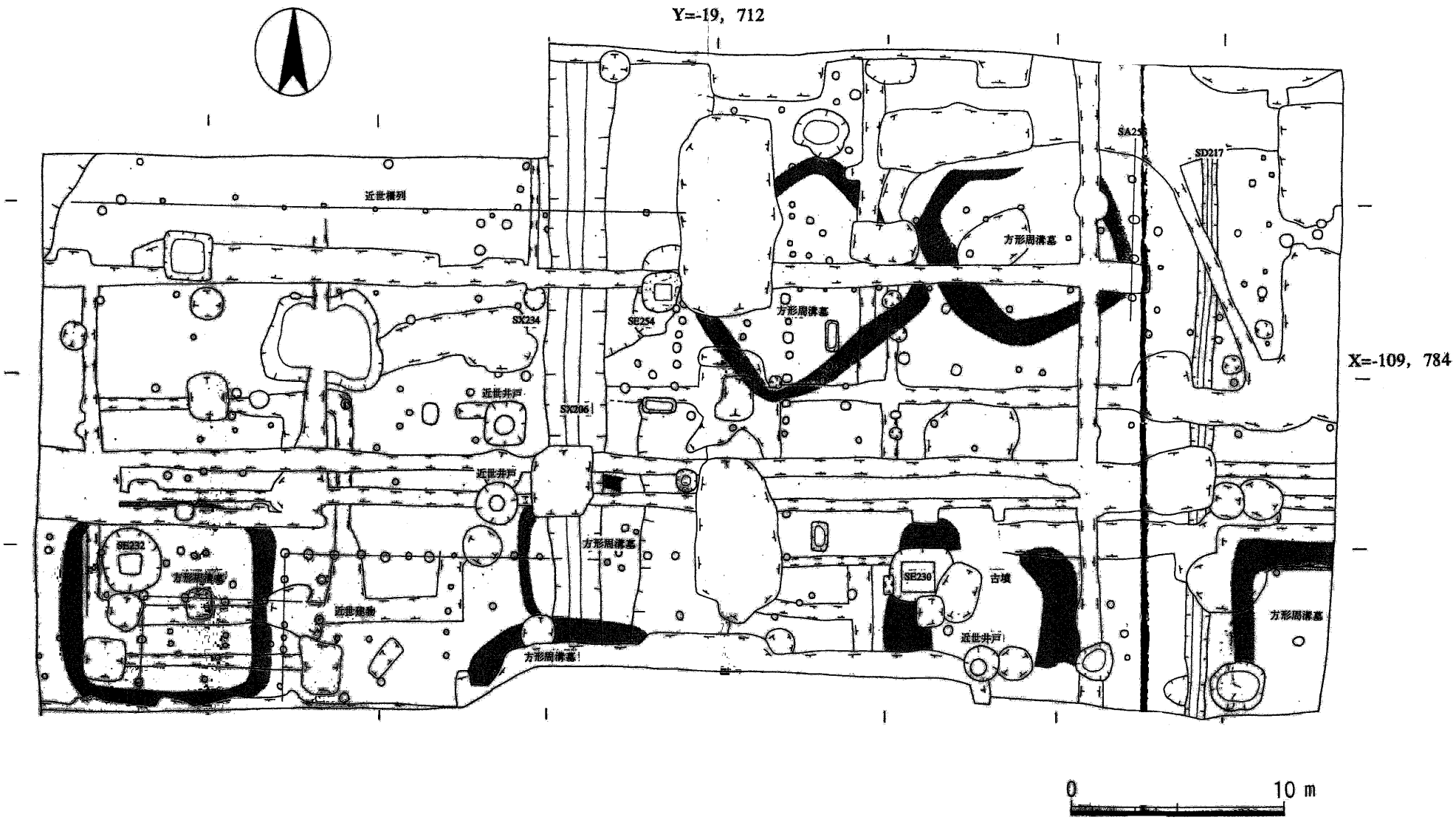
江戸時代のはじめになると、京都の各地で登窯による本格的な陶器生産が開始されますが、これらを「京焼」と総称しています。粟田焼は京焼の中でも最初に開窯された重要な陶窯で、三条粟田口において寛永年間（1624～1643）のはじめに瀬戸出身の三文字屋九右衛門が開窯したと伝えられています。現在、三文字屋九右衛門の作と伝える瀬戸風の耳付水指や茶碗・茶入などが伝えられており、粟田焼が古瀬戸写しを基本としていたことが分かります。また、元禄7年（1694）に編纂された『古今和漢諸道具見知鈔』には、「粟田口焼　茶入　茶碗　其外品々有茶入は土薬なりかつかう唐物ひたち帯によく似たる物也」とあり、粟田焼が京焼諸窯の中でも茶器を中心に伝統の唐物写しを焼成していたことも明らかです。とくに色絵陶器はすばらしく、享和2年（1802）に京都へやってきた滝沢馬琴が粟田焼の陶器を見て「京都の陶は粟田口よろし　清水はおとれり」と記しているほどです。粟田焼のその後の発展については、17世紀中頃に小林徳右衛門・宝山文蔵が窯を築き、18世紀にはいって一文字屋忠兵衛・鍵屋源太郎・岩倉山吉兵衛・帯山与兵衛らが相次いで築窯するに及んで粟田焼の同業者町が形成されていきました。そして、明治時代にはいり京都博覧会が開催されるに及んで粟田焼は輸出事業として隆盛し、海外での博覧会にも多くの作品を出展しました。しかし、大正から昭和にかけての世界的な経済不況に対応して徐々に衰退にむかい、残念ながら現在では粟田の地に窯は途絶えてしまったのです。

まとめ

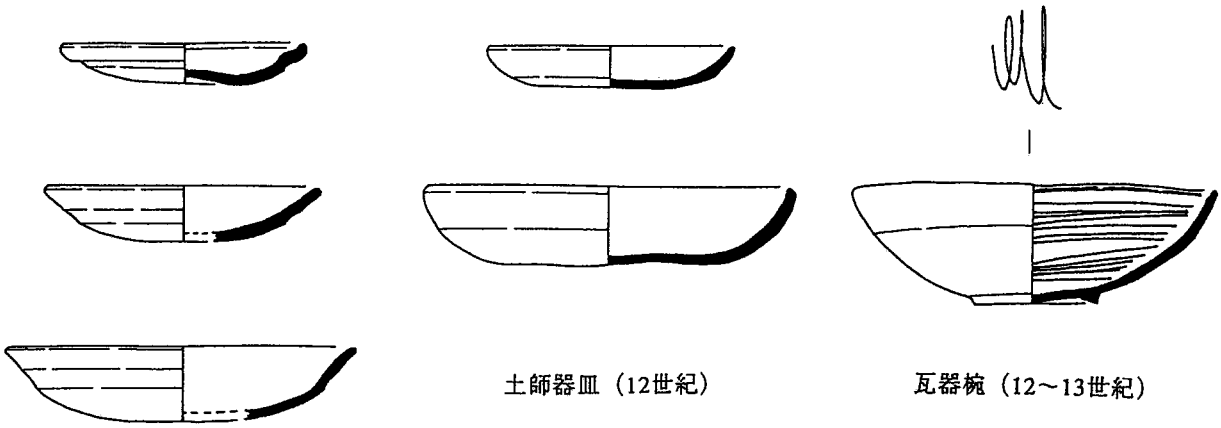
今回の調査では成勝寺に直接関係する遺構を確認できませんでしたが、同時期の井戸群を検出したことによって寺院の中心伽藍を推定するのは難しくなりました。六勝寺の中で発掘調査によってその位置が明らかとなったのは法勝寺と尊勝寺だけであり、白河街区の復元を含め他の寺院の配置について再検討する必要があるでしょう。また、粟田焼き関係の遺物の出土も注目できます。さらに、方形周溝墓群が確認されたのも大きな成果です。この地域は白川の氾濫原であり集落には適しておらず、墓域として利用されていたと想定できます。墳墓が形成されていった過程については、調査がまだ進んでおらず今後の課題といえるでしょう。


北門前町
妙傳寺
瑞雲閣
大阪営林局平安アパート
K6
志多美
K3
開名寺
本妙寺
京都水道会館
北区
南区
市立伝統産業会館
日団デザイン博物会館
駐車場
一条通
一般道路水
0
100m

調査位置図


Y=-19，712
X=-109，784
近世構列
SX234
SE254
SX206
近世井戸
近世井戸
SE232
方形周溝墓
近世建物
方形周溝墓
方形周溝墓
方形周溝墓
SE230
古墳
近世井戸
SA235
SD217
方形周溝墓
0
10 m

北 区 遺 構 配 置 図

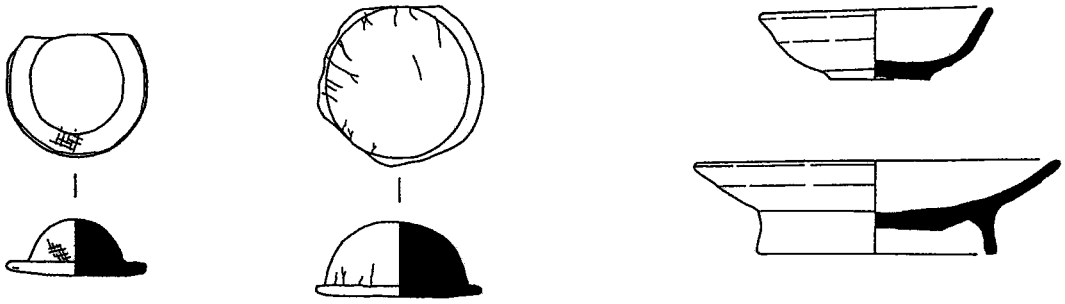


造営直前の土師器皿（11世紀末）

土師器皿（12世紀）

瓦器椀（12～13世紀）

平安時代後期の土器

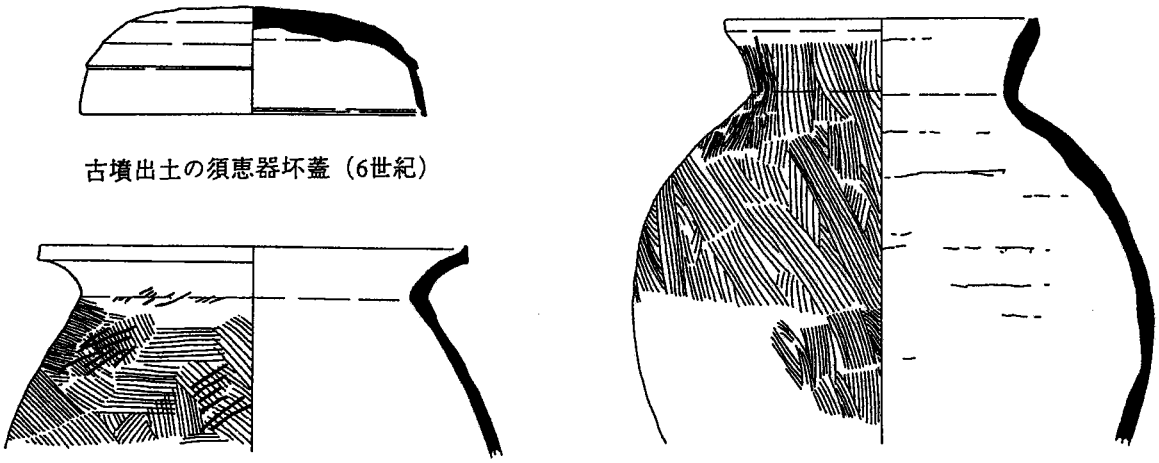


緑釉

無釉

土　塔（12世紀）

白色土器（12世紀）



古墳出土の須恵器坏蓋（6世紀）

方形周溝墓出土の甕
（3世紀後半）

下層の土器

下層溝出土の甕
（3世紀後半）

0　20cm

平安時代後期の瓦

（参考資料）

白河街区跡（推定最勝寺跡）の発掘調査成果

（財）京都市埋蔵文化財研究所　1992年12月12日

所在地	京都市左京区岡崎最勝寺町（岡崎グランド内）
調査期間	1991年９月30日～1992年９月17日
調査面積	10,041㎡

はじめに

この岡崎勧業館跡の調査地から東へ約200mいった地点の岡崎グランド内で、1991年９月30日から1992年９月17日の間、約１年間にわたって発掘調査を行いました。岡崎グランドの調査でもさまざまな重要な発見がありましたが、いろいろな理由で現地説明会などができませんでした。ここ岡崎勧業館の調査成果と一連のものでもありますし、この場をお借りして成果の一部を発表いたします。

平安時代の遺構（11～12世紀）

岡崎グランドは六勝寺の一寺院である最勝寺の推定地にあたります。最勝寺は鳥羽天皇の御願寺で、六勝寺のうち最初に建てられた法勝寺、次に建てられた尊勝寺に引き続き、元永元年（1118）に供養されました。ここでは、広範囲に発掘したにも関わらず、最勝寺の伽藍の遺構は発見できませんでした。後の時代の開発などで、遺構がすでに破壊されていたのかも知れません。

岡崎グランドの南端に、最勝寺と同時代の東西方向の溝（東西溝16）とこぶし大の礫を大量に用いた基礎工事跡（地業100・111）を発見しました。東西溝は六勝寺の造営に伴って整備された二条大路末の北側の側溝、基礎工事跡は築地塀を構築するためのものと考えることができます。二条大路末は、六勝寺や院の御所を中心に栄えた白河街区のメインストリートで、これに関わる明確な遺構を発見したのは今回が初めてです。この道路は古来の蹴上と太秦を結ぶ古道であった可能性があります。

古墳時代後期の遺構（６世紀後半）

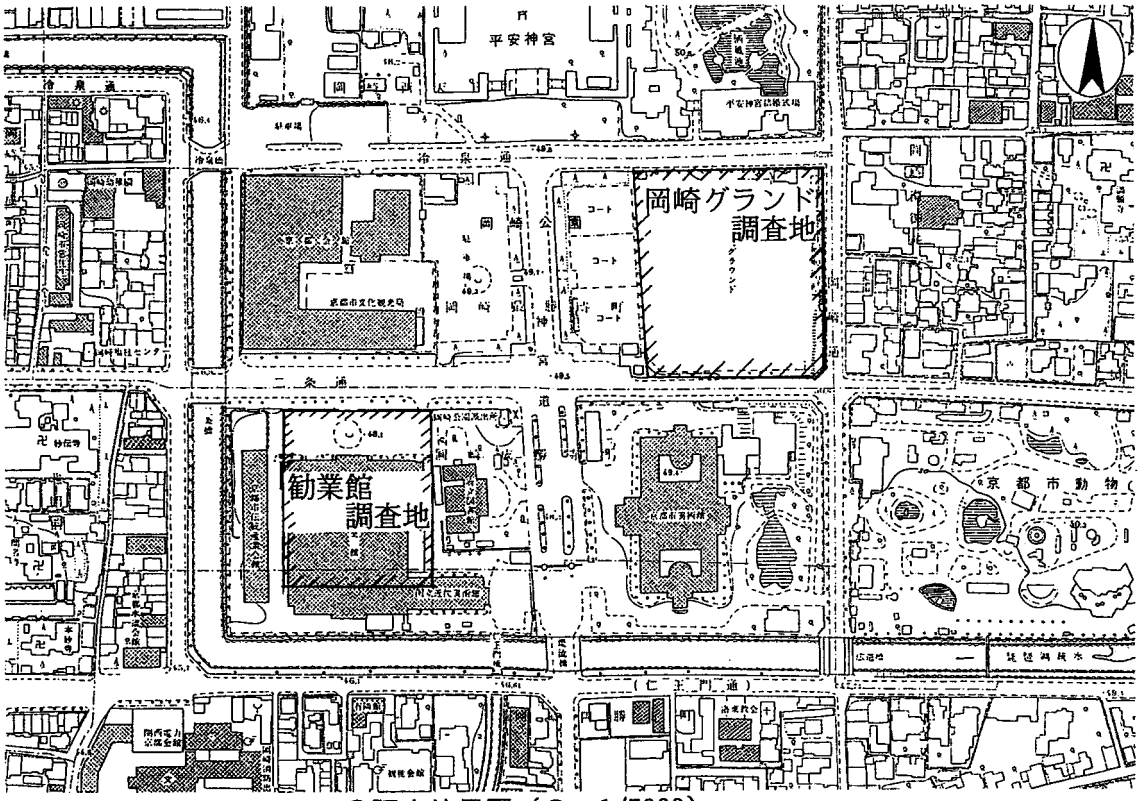
岡崎グランド内には、かつて「鵺塚（ぬえづか）」という塚が後高倉太上天皇の陵墓参考地として存在していました。「鵺塚」は、1965年に発掘調査の後、伏見区の月輪南陵に移転されました。今回の発掘調査ではこの「鵺塚」の跡を発見しましたが、さらにその下に、古墳時代後期の古墳跡を２基発見しました。このことから、「鵺塚」は古墳の墳丘を引き継いだものであることが判明しました。また、古墳は平安時代にも姿を地上にとどめていたことも判りました。古墳は２基とも円墳で、墳丘部分の直径は、南の１号墳は約20m、北の２号墳は約15m（復元）あります。

弥生時代末期から古墳時代初頭にかけての遺構（３世紀後半）

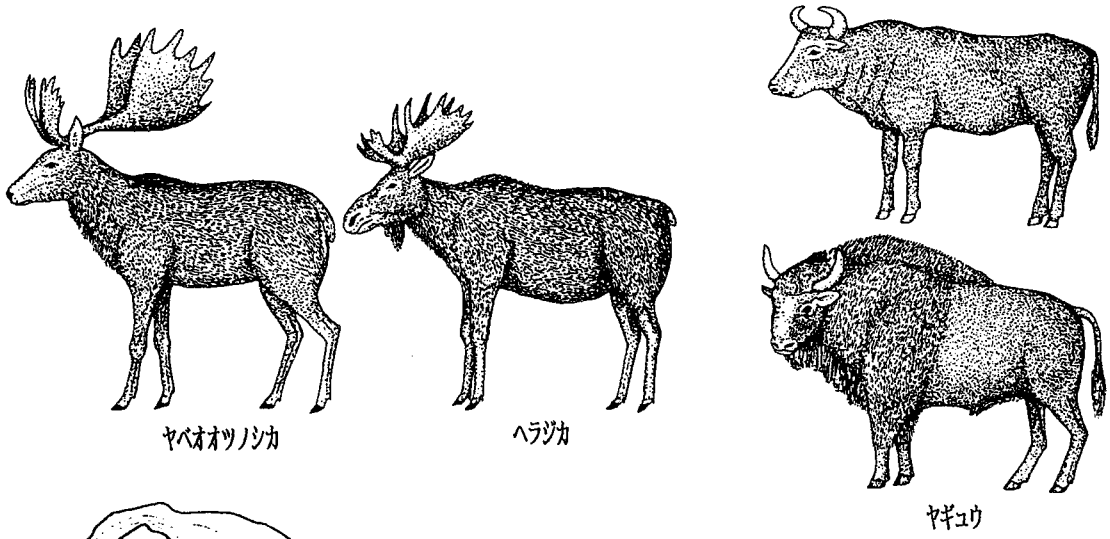
調査区の東半分には、弥生時代の末期から古墳時代の始めにかけての川の跡（自然流路110）を発見しました。この川跡は、縄文時代早期（約9000年前）から続く湿地上を北から南へ南流するもので、一部は平安時代にも湿地化して残っている様子を確認できました。川跡の中から、木材を乾燥から保護するための貯木施設や堰の跡（堰114）を発見しました。また、川跡からは多量の土器や木製品が出土しました。

旧石器時代の遺構（２万数千年前）

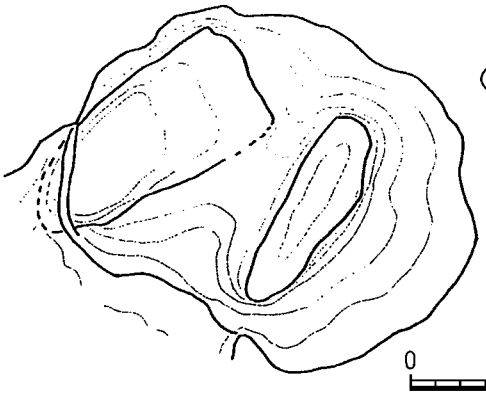
縄文時代以降の遺構の基盤になっている黄白色の砂層を約1.5m掘り下げると、下から平安神宮火山灰と呼ばれる厚さ10cmほどで黄灰色の火山灰層が顔を出します。この火山灰は鹿児島湾のいちばん奥の部分にあった火山が、２万数千年前に噴火した際に京都まで飛来したもので、日本列島各地で発見されている姶良Tn火山灰（AT）に比定されています。この火山灰の上に薄くたまった腐食土層の上面で動物の足跡を発見しました。足跡はひづめが二つに分かれている偶蹄類（シカやウシの類）のもので、長さは10cm以上もあるかなり大型の動物のものです。これに該当する当時の動物は、ヤベオオツノシカ・ヘラジカ・ヤギュウなどが知られていますが、特定できません。同様の足跡は、1989年の京都市動物園内の調査でも発見しています。２万数千年前は氷河時代でももっとも寒冷な時期で、京都盆地の自然環境は現在の中部高地や北海道によく似たものだったといわれています。考古学の年代では後期旧石器時代にあたりますが、人の残した遺物などは見つかりませんでした。



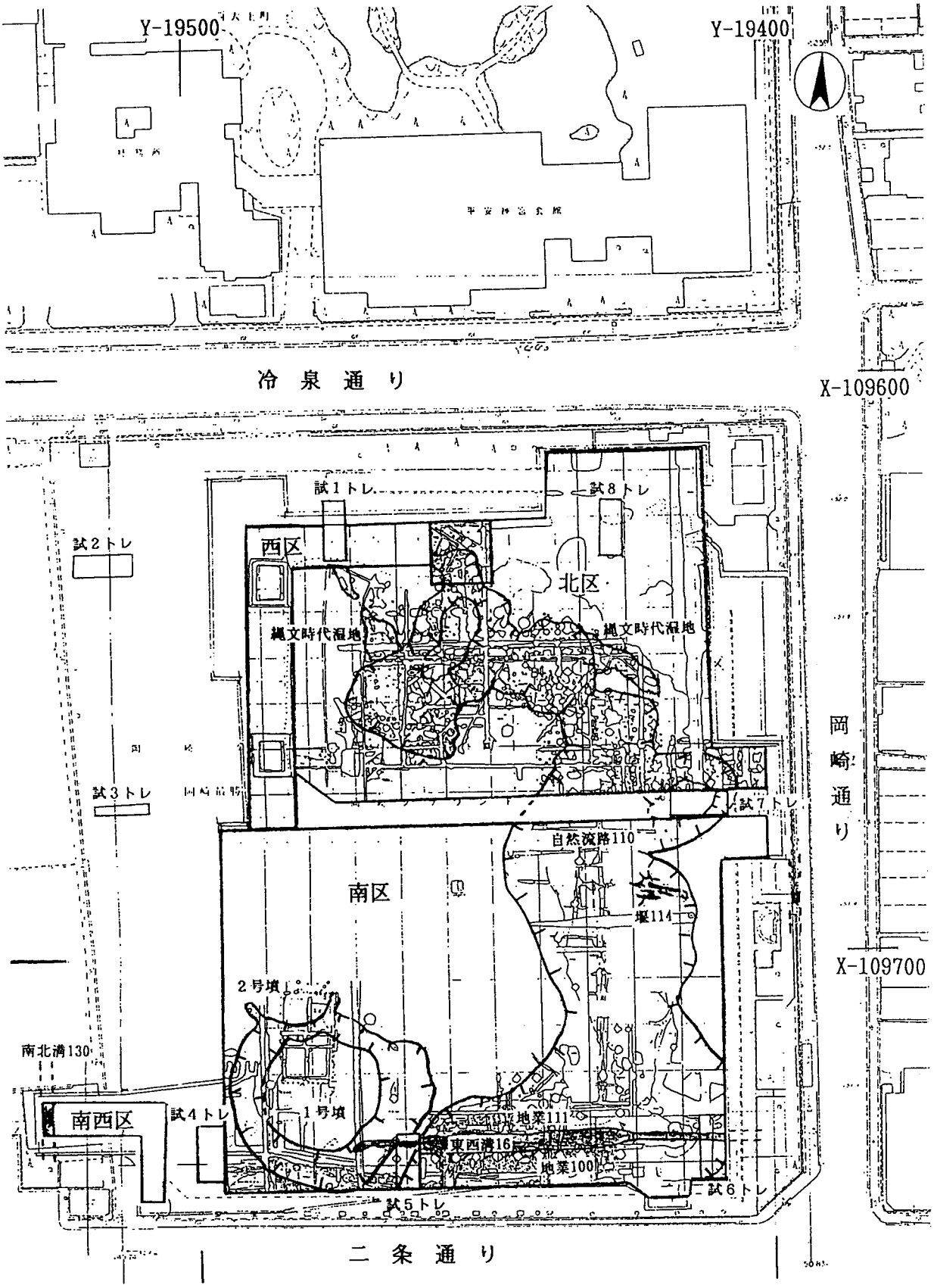
①調査位置図（S＝1/5000）



②旧石器時代の日本列島に生息していた大型偶蹄類（上）
亀井節夫編『日本の長鼻類化石』(1991 築地書館)より



③発見した大型偶蹄類の足跡（左）
S＝1／3



④調査区の配置と主要遺構（S＝1/1000）